

## 聴解教育における教師の役割

—日本語オンライン教材を使用した学習者の反応に基づいて—

野田 尚史 (日本大学)

中島 晶子 (パリ・シテ大学)

村田 裕美子 (ミュンヘン大学)

加藤 さやか (サラマンカ大学)

梅澤 薫 (ダラム大学)

### 要旨

オンラインによる聴解教育で教師が果たすべき役割を考察するために、イギリス・ドイツ・フランス・スペインの日本語学習者に独習用オンライン日本語聴解教材「日本語を聞きたい!」を使ってもらい、アンケートとインタビューを行った。その結果、オンライン聴解教育における教師の役割として、(i)から(iii)が重要なことが明らかになった。

- (i) 学習者は実際の日本語の聴解に役立つ教材を望んでいる。教師は現実に使われる日本語の聴解に役立つさまざまなオンライン聴解教材を作成していく必要がある。
- (ii) 伝統的な学習方法に慣れている学習者がいる。教師は聴解教育以外でも実際のコミュニケーションを重視した教育を行い、学習方法の転換を促していく必要がある。
- (iii) 新しい学習方法を取り入れたオンライン教材に適応できる学習者と適応できない学習者がいる。教師はそれぞれの学習者に合わせた指導を個別に行う必要がある。

**【キーワード】** 聴解, オンライン教材, 学習者, インタビュー, 教師

**Keywords:** listening, online materials, learners, interview, teachers

## 1 研究の背景と目的

1 では、1.1 でこの研究の背景を述べ、1.2 でこの研究の目的を述べる。そして、1.3 でこの論文の構成を示す。

### 1.1 この研究の背景

これからの日本語教育は、対面授業のほうが効果的なものは対面で行い、オンライン学習でも効果的なものはオンライン教材を提供する形に少しずつ変わっていくと考えられる。たとえば、会話の練習は対面で行い、作文の添削はファイルの共有で行い、聴解や読解の練習はオンライン教材を提供する形である。

日本語教育がそのように変わっていくとすると、学習者がオンラインで聴解や読解の学習をするときに教師が果たすべき役割を考えておく必要がある。

### 1.2 この論文の目的

この論文の目的は、聴解教育をオンライン教材の提供を中心にした場合に、教師が果たすべき役割は何かを明らかにすることである。

その目的のために、学習者にオンライン教材を使ってもらい、アンケートとインタビューで学習者の声を集める調査を行った。その調査の結果に基づいて、オンライン教材の提供を中心にした聴解教育における教師の役割を考察する。

### 1.3 この論文の構成

この論文の構成は次のとおりである。次の 2 で調査方法について説明し、3 で調査に使用した聴解教材「日本語を聞きたい！」について述べる。

その後、4 から 6 で調査結果に基づいて教師の役割を 3 つに分けて示す。4 では教材の作成という教師の役割を、5 では学習方法の転換促進という教師の役割を、6 では学習者に対する個別対応という教師の役割を取り上げる。

最後に、7 でこの論文のまとめを行い、今後の課題を述べる。

## 2 調査の方法

2 では、2.1 で調査の手順を述べ、2.2 で調査協力者の情報を示す。

### 2.1 調査の手順

日本語学習者にオンライン教材を使ってもらい、アンケートとインタビューで学習者の声を集める調査を(1)から(3)の手順で行った。

- (1) 野田尚史がチーフプロデューサーとして作成中の独習用オンライン日本語聴解教材「日本語を聞きたい！」(<https://www.nihongo-tai.com/japanese/kiku/>)を日本語学習者である調査協力者に使ってもらう。
- (2) 調査協力者に、教材の実用性や使いやすさ、今後作成してほしい教材、オンライン学習で教師に望むことなどを答えてもらうアンケートを行う。
- (3) 一部の調査協力者には、アンケートに加えて、教材を使った感想やオンライン学習についての感想を答えてもらうインタビューを行う。

アンケートとインタビューは、イギリスでは英語、ドイツではドイツ語、フランスではフランス語、スペインではスペイン語を使って行った。

### 2.2 調査協力者

調査は、オンライン学習があまり普及していなかった時期とかなり普及した後の時期の2回行った。それぞれの調査の時期と調査協力者は(4)と(5)のとおりである。

- (4) オンライン学習普及前 (2019年3月～2021年1月)
  - ドイツ：12名 (12名にはインタビューも行った)
  - フランス：15名
  - スペイン：5名
- (5) オンライン学習普及後 (2022年4月～2022年7月)
  - イギリス：16名 (11名にはインタビューも行った)
  - ドイツ：11名 (11名にはインタビューも行った)

フランス：9名（9名にはインタビューも行った）

スペイン：18名（13名にはインタビューも行った）

調査協力者の日本語レベルは、(4)のオンライン学習普及前の調査では初級 25 名，中級 7 名であった。(5)のオンライン学習普及後の調査では初級 37 名，中級 11 名，上級 6 名であった。

なお，この教材に対する学習者の評価を調査したものとして，阪上他（2022）と村田（2022）がある。

### 3 調査に使用した聴解教材「日本語を聞きたい！」

3では，3.1で調査に使用した聴解教材「日本語を聞きたい！」の作成方針を述べ，3.2でこの教材の構成を示す。そして，3.3で調査協力者が使用した教材の内訳を示す。

#### 3.1 聴解教材「日本語を聞きたい！」の作成方針

調査に使用した独習用オンライン日本語聴解教材「日本語を聞きたい！」の作成方針は，野田他（編）（2022）でも示されているが，(6)から(8)のようなものである。

- (6) 明確な目標設定：その音声を聞いて何を理解できるようになるのかという目標設定を明確なものにする。
- (7) 現実的な状況設定：その音声をどのような状況で聞くのかという状況設定を現実的なものにする。
- (8) 聴解技術の明示：聞いた音声からどの部分を聞きとり，そこから何を理解すればよいのかという聴解技術を明示する。

#### 3.2 聴解教材「日本語を聞きたい！」の構成

「日本語を聞きたい！」には，現在，10のテーマの教材が掲載されている。どの教材も，「目標」「状況」「スキル」「練習」で構成されている。教材の表示言語は，日本語，英語，中国語，韓国語から選ぶことができる。

「コーヒーショップ」という教材の中で(9)が目標になっている部分を例にすると、そこに 7 つのスキルが入っている。たとえば、(10)のようなスキルである。「▶」をクリックすると、[ ] 内に示されている音声流れるようになっている。

(9) 目標：コーヒーショップで注文する前に質問されることを聞きとれるようになります。

(10) スキル 3：店内で飲むかどうかについて質問されていることを聞きとる  
次のような表現から、店内で飲むことについて質問されていることを聞きとります。

▶ [ごりよーですか?]

▶ [おめしあがりですか?]

次のような表現から、テイクアウトについて質問されていることを聞きとります。

▶ [おもちかえりですか?]

スキルが示された後、たとえば(11)のような練習ができるようになっている。

(11) 店内で飲むかどうかについて質問していますか。

▶ [てんないでおめしあがりですか?]

1 質問している      2 質問していない

この練習で「1」を選ぶと「正解」と表示され、「2」を選ぶと「不正解」という表示とともに(12)のような説明が表示される。

(12) [おめしあがり] と言っています。

練習は 1 つのスキルに 10 問あるが、途中でやめて次のスキルに進むこともできる。

### 3.3 調査協力者が使用した教材のテーマと人数

調査協力者が使用した教材のテーマと人数は、(13)のとおりである。

(13) コンビニ：35名

    コーヒーショップ：14名

ハンバーガーショップ：5名

カラオケ店：12名

クリーニング店：1名

自宅のインターホン：9名

友だちとの雑談：13名

会社の会議：4名

著作権についての講義：4名

ホルモンの仕組みについての講義：5名

#### 4 教材の作成という教師の役割

ここからの 4 から 6 では、調査結果に基づいて教師の役割を 3 つに分けて示す。4 では教材の作成という教師の役割を、5 では学習方法の転換促進という教師の役割を、6 では学習者に対する個別対応という教師の役割を取り上げる。

この 4 では教材の作成という教師の役割を取り上げる。4.1 で学習者が教材についてよいと思ったことを紹介し、4.2 で逆に教材について改善してほしいと思ったことを紹介する。そして、4.3 でそのような学習者の声に対して教師はどのように対応すればよいのかを述べる。

##### 4.1 学習者が教材についてよいと思ったこと

学習者が聴解教材「日本語を聞きたい！」についてよいと思ったこととして、(14) から(17)のような声があった。

- (14) 現実の生活に即した表現が学べるのがいい。従来の教科書ではあまり見かけない気がする。 (スペイン)
- (15) 場面や状況から好きなトピックを選ぶこともできて便利だった。 (イギリス)
- (16) 問題となる場面でどのようなプロセスのやり取りがあるのかがわかりやすく説明されていて、よく理解できる。 (フランス)

- (17) 話すスピードがそれぞれ違うので、レッスンにバリエーションが生まれ、よりリアルに感じられた。 (ドイツ)

#### 4.2 学習者が教材について改善してほしいと思ったこと

学習者が聴解教材「日本語を聞きたい！」について改善してほしいと思ったこととして、(18)から(21)のような声があった。

- (18) N5, N4, N3 などのレベルが示してあるといい。 (フランス)
- (19) 説明が付いていない専門用語がときどき出てくるので、説明がほしい。(ドイツ)
- (20) 選択肢の数を増やすほうがいいと思う。2つしかないと、正しく理解していなくても正答できてしまうことが多くなる。 (スペイン)
- (21) 音だけを聞くのではなく、状況が見えるビデオがほしい。ストーリー性のあるビデオがあるといい。音だけだと退屈になって、続かない。 (イギリス)

#### 4.3 教材についての学習者の声に対する教師の対応

教師は、4.1 で述べた教材についての学習者の声に応じるには(22)のような対応を、4.2 で述べた学習者の声に応じるには(23)と(24)のような対応をする必要がある。

- (22) 実際に役立つさまざまな教材を作成する。
- (23) 教材の意図や使い方を説明する。
- (24) 将来的には動画を付けるなどして教材をより魅力的なものにする。

このうち、(22)は日本語を学習する個々の学習者の目的に合わせて、さまざまな教材を作成していくということである。今回の調査で学習者から聴解教材のテーマとして要望があったのは、「レストラン」「居酒屋」「病院」「公共交通機関」「会社の中での会話」「日本の歴史や文化」といったものである。

次に、(23)はこのような新しいタイプの教材については教材の意図や使い方を説明し、(25)から(27)のような指導を行うということである。

- (25) 自分の日本語レベルに合わせて教材を選ぶのではなく、自分にとって必要なテ

一マの教材を選んでほしい。

(26) 聞いたことのすべてを理解できなくても、必要な情報が得られればよいと割り切って学習してほしい。

(27) 試験とは違い、説明を理解して練習を行えば、誰でもすべて正解できるようになっている。深く考えなくても聞いてすぐに理解できるようになってほしい。

最後に、(24)は将来的にはイラストや動画を付けるなどして教材をより魅力的なものにするということである。現在はネット環境が悪い地域に住んでいる学習者のために、意図的にテキストと音声だけで教材を作成するようにしている。将来、世界中のネット環境がよくなれば、イラストや動画を付けるようにしたほうがよい。

なお、オンライン聴解教材の作成についての研究として、簡（2013）や中西（2003）がある。

## 5 学習方法の転換促進という教師の役割

5 では、学習方法の転換促進という教師の役割を取り上げる。5.1 で学習方法の転換に対応しやすい学習者の声を紹介し、5.2 で逆に学習方法の転換に対応しにくい学習者の声を紹介する。そして、5.3 で学習方法の転換に対応しにくい学習者に対して教師はどのように対応すればよいのかを述べる。

### 5.1 学習方法の転換に対応しやすい学習者の声

「日本語を聞きたい！」のような新しいタイプの教材を使うときには、学習者に学習方法を転換してもらう必要がある。学習者がその教材が意図している学習方法で学習しなければ、その教材が意図している学習効果が得られにくいからである。

実際のコミュニケーションを重視したこのような教材に対応しやすい学習者からは、(28)から(31)のような声があった。

(28) 言っていることが全部わからなくても、それが質問なのか提案なのかなどがわかってよい。(イギリス)



- (29) 大学の授業で学ぶ専門用語や高度な表現と、この教材で学ぶ日常的事物との違いに気づくことができた。(ドイツ)
- (30) 『みんなの日本語』のように完璧な発音や、わざとらしいゆっくりした話し方ではなかった。(スペイン)
- (31) 授業と違って、みんなの前で間違った答えを言う心配もなく自分のペースでじっくり考えることができる。(フランス)

## 5.2 学習方法の転換に対応しにくい学習者の声

一方で、自分の日本語レベルに合った日本語を聞き、聞いたことすべてを理解できるようにするという伝統的な学習方法に慣れていて、新しい学習方法に対応しにくい学習者からは、(32)から(35)のような声があった。

- (32) ほとんどがキーワードだけを聞いて理解したので、話者が言ったことを正確に理解できるようになるとよい。(ドイツ)
- (33) 練習の最後でもいいから、スクリプトがあって確認することができると、新しい語彙も学べるし、いいと思う。(スペイン)
- (34) 『みんなの日本語』などの教科書のように音声をはっきりしていないので、聞き取りにくかった。(フランス)
- (35) ときどき発話が長すぎて、また速すぎて、覚えられない。(イギリス)

## 5.3 学習方法の転換に対応しにくい学習者に対する教師の対応

5.2 で述べた学習方法の転換に対応しにくい学習者に対しては、教師は学習者の学習方法の転換を促していく必要がある。具体的には、教材の意図や使い方を丁寧に説明したり、学習方法の転換に対応できた学習者の経験を伝えたりすることである。

ただ、オンライン聴解教材で学習するときだけ学習方法を転換してもらうのは難しい。教師は日ごろからオンラインの聴解教育以外でも実際のコミュニケーションを重視した教育を行い、学習者の学習方法全般の転換を促していく必要がある。

## 6 学習者に対する個別対応という教師の役割

6 では、学習者に対する個別対応という教師の役割を取り上げる。6.1 で教師の役割についての学習者の声を紹介する。そして、6.2 でそのような学習者の声に対して教師はどのように対応すればよいのかを述べる。

### 6.1 教師の役割についての学習者の声

学習者がオンライン学習をするときに教師に望むこととして、(36)から(39)のような声があった。

- (36) オンライン教材でわからなかった部分について教えたり、いっしょに練習したりしてほしい。 (ドイツ)
- (37) 録音の声だけでなく、実際の間が話しているのを聞く練習ができるように教師に指導してほしい。 (イギリス)
- (38) 教師の存在はメンタルサポートとしてとても重要。学生が一人取り残されてしまっていると感じないように、教育的なフォローをすることは重要。(フランス)
- (39) よくできているオンライン教材を紹介してほしい。また、効果的な使い方のアドバイスがほしい。 (スペイン)

### 6.2 教師の役割についての学習者の声に対する教師の対応

6.1 で述べた教師の役割についての学習者の声に応じるには、教師は個々の学習者に合わせた指導を行う必要がある。具体的には、(40)から(42)のようなことである。

- (40) 新しい学習方法を取り入れたオンライン教材に対応しやすい学習者と対応しにくい学習者がいる。それぞれの学習者に合わせた指導を個別に行う必要がある。
- (41) 学習者は教師が個別に対応してくれることで安心し、モチベーションも上がる。教師がサポートする体制が必要である。
- (42) オンライン学習では、自分に必要な教材を選んで学習できる。教師は個々の学習者に合わせて教材を紹介し、その使い方をアドバイスする必要がある。

## 7 まとめと今後の課題

7では、7.1でこの論文のまとめを行い、7.2で今後の課題を示す。

### 7.1 この論文のまとめ

この論文では、学習者にオンライン教材を使ってもらい、アンケートとインタビューで学習者の声を集める調査を行った結果を示した。それに基づいて、オンラインによる聴解教育で教師が果たすべき役割を(43)から(45)の3つにまとめた。

- (43) 教材の作成：今回使用した教材は実際の場면을重視したものであったため、学習者からは「実際の日本語の聴解に役立つ」という反応が多かった。教師は現実に使われる日本語の聴解に役立つさまざまな教材を作成していく必要がある。
- (44) 学習方法の転換促進：今回の教材は細部にはこだわらずに重要な点だけを聞きとるものだったため、伝統的な学習方法に慣れている一部の学習者からは「聞いた音声をすべて理解したい」といった反応もあった。教師は聴解教育以外でも新しい方法で教育を行い、学習者の学習方法の転換を促していく必要がある。
- (45) 学習者に対する個別対応：新しい学習方法を取り入れたオンライン教材にすぐに適応できる学習者と適応できない学習者がいた。教師はそれぞれの学習者に合わせた指導を個別に行う必要がある。

今後、オンライン学習がさらに広がっていくと、教師の役割を、対面授業の実施だけではなく、独習が可能なオンライン教材の作成や学習者に対する個別対応などにも広げていく必要がある。

### 7.2 今後の課題

今後の課題としては、今回のような調査を継続して行い、その結果に基づいて教師の役割を考え続けていくことが挙げられる。

というのは、オンライン学習に対する学習者の意識は変化しやすいからである。今回の調査でも、オンライン学習普及前（2019年3月～2021年1月）は「すべての

日本語に翻訳を付けてほしい」という注文や「このような教材だけでは不十分だ」という意見が多かった。それに対して、オンライン学習普及後（2022年4月～2022年7月）は、そのような注文や意見は見られなくなっていた。

今後、言語学習だけではなく、さまざまな学習でもオンライン学習が広がっていく可能性が高い。また、オンライン学習に慣れ親しんでいる世代が増えていく。その結果、オンライン授業に対する学習者の意識も大きく変わっていくと考えられる。今後も、オンライン学習に対する日本語学習者の意識を継続して調査していく必要がある。

### <付記>

この論文は、JSPS 科研費 22H00669 と国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」の研究成果である。調査の実施では、白石実氏（バルセロナ自治大学）と Mark Critchley 氏（ダラム大学）の協力を得た。

### <引用文献>

- 簡珮鈴（2013）『初級日本語 e ラーニング教材開発についての実践研究—聴解教材の場合』（博士論文），大阪大学, <https://doi.org/10.18910/26223>（2022年9月20日）。
- 阪上彩子・太原ゆか（2022）「教材のアジアでの試用結果」, 野田尚史・中尾有岐（編）『日本語コミュニケーションのための聴解教材の作成』 pp.217-227, ひつじ書房.
- 中西家栄子（2003）「Web 対応日本語聴解教材の研究開発と試行結果」『独協大学外国語教育研究』 21, pp.41-66, 独協大学外国語教育研究所.
- 野田尚史・中尾有岐（編）（2022）『日本語コミュニケーションのための聴解教材の作成』 ひつじ書房.
- 村田裕美子（2022）「教材のヨーロッパでの試用結果」, 野田尚史・中尾有岐（編）『日本語コミュニケーションのための聴解教材の作成』 pp.229-243, ひつじ書房.